リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

動画で防災を知る

市民らが共同制作　来年1月公開

10月20日、芦屋市立浜風小学校で、防災倉庫に関する動画撮影が行われた。芦屋市民に防災について知ってもらうことを目的として、市や市民団体、地元の有志らが共同制作した。リードあしや新聞の記者であるクラーク記念国際高校防災部のメンバーが撮影を取材し、関係者にインタビューをした。

制作には、芦屋市映像倶楽部あしゾウ、芦屋市の高校生、芦屋市の防災士、防災安全課が参加した。

今回、撮影に立ち会ったのは「防災用ポンプ」についての説明。当初は小規模で行われる予定だったが、結果20人を超えるメンバーが現地に集まった。何度も繰り返し撮影を行っており、動画をよりよいものにしようという姿勢が感じられた。

また、今回の動画撮影を企画したリードあしやの橋野浩美さんは、今後の取り組みについて、「街をジオラマ化したり、ドローンを飛ばすなど、普段の私たちでは感じられないような新しい視点から防災を考えていきたい」と語った。

この動画は最終的に、2021年1月16日にオンラインにて開催される「災害時ケースマネージメント」にて公開し、その後、動画配信サイトにも投稿される予定だ。

災害が多い日本において、防災の知識は自らの身を守るために必要不可欠となってくる。この動画によって、防災に対する意識が少しでも変わることが期待される。

（山西敦士）

◇　◇

災害時ケースマネージメントは、リードあしやで参加申し込みを受付中。定員80人。

防災意識を広めたい

芦屋市を拠点に、防災士として活動する楠本さんにインタビューすると、阪神・淡路大震災での経験を話してくれた。

防災グッズを用意しておらず、スリッパも靴も履かずに外に飛び出した楠本さんは、ガラスを踏んで大怪我をした。救急車を呼んだものの、「命に別状なし」と搬送されず、「災害時、公助は期待できない。自助が大切だと痛感しました。その経験から、いかに防災が大事かを皆さんに知って欲しいと思ったのです」と話す。

全てはあの凄惨な阪神・淡路大震災からの経験なのだ。防災が如何に重要かを知らしめる、想像を絶する災害だったのだろう。

そんな楠本さんの普段の活動は、芦屋市だけに留まらず、兵庫県内各地で開かれる防災研修で講義をすること。防災の重要性を広く訴えているのだ。

災害に遭遇した際は「自分の命を助けること（自助）が最優先」だと楠本さんは語る。普段から災害を意識し、高齢者や持病のある方は必要な薬を用意しておくなど、さまざまな視点から取り組むべきことを教えてくれた。

災害を普段から常に意識することは難しい。しかし、確かな知識を蓄え、防災の取り組みをしていれば、襲い来る災害にも対応できることだろう。

まずは、防災の重要性を広く知って貰うことからだ。一人でも多くの人に、この記事が目に留まることを願わずにはいられない。

（河原悠陽）

次に繋ぐ防災教育

芦屋市教育委員会の浅田さんは、今回の防災倉庫の紹介動画の撮影のために、舞台である浜風小学校の授業や活動と撮影の予定が重ならないように校長と連携し、調整に当たった。

インタビューで浅田さんは、今回行われた撮影会について「高校生の熱心な活動に感動した。この撮影の場で得たことを芦屋市の小中学校へ伝わるように働きかけたい」と語った。さらに「今後より一層、防災教育に力を入れていきたい」と続けた。

次につなげられるような活動を考えている最中だという浅田さん。今後の防災に関する教育方針として「子どもたちが主体的に取り組むことが出来るような学習展開を小中学校の教師と連携して行い、防災士や地元の方を巻き込んだ活動をしたい」と話した。

「30年以内に南海トラフ巨大地震が起こる確率は70％を上回る」と言われている。その中で、自分や家族、大切な人を守るためには防災への意識を今以上に高めなくてはならない。少しでも防災に対しての意識が高まってほしい。

（端山このみ）

災害に備え対策づくり

撮影に参加した芦屋市防災安全課の山西さんにインタビューした。防災安全課は、耐震工事や避難所作成など「ハード面」を担う防災対策と、呼びかけや啓発など「ソフト面」を担当する地域防災に分かれている。山西さんは現在、地域防災に所属している。

普段の啓発活動だけでなく、さらに毎年総合公園にて防災訓練のイベントなどを行っているという。

山西さんは「いつか起こる可能性のある、南海トラフのような想定外な規模の災害や、日々の変化への対応など、懸念点も多くある」と語った。対策として「ハザードマップ等の作成や、啓発活動の活発化を行う。また、現在の知名度や認知度の向上を行っていきたい」という。

今回の活動に対して、「まったく防災について知らなかった方が興味を持つきっかけになればうれしい」と語った。（山西敦士）